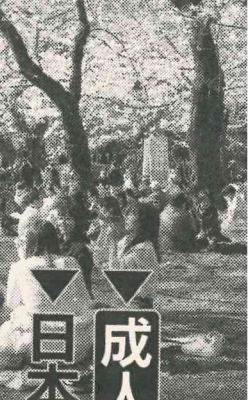




WHOが「成人に追加接種を推奨せず」 ワクチン 最終結論



成人は打たなくても死なない、一方高齢者は…
日本人の4割に抗体「第9波はおそろしく高い」

「WHOでさえ子どもへのワクチン接種が不要だと言っている」〜ワクチン接種の間違いを認めた

世の中にこうした言説が溢れたのは、三月二十九日のこと。前日、WHO（世界保健機関）がコロナワクチンの接種に関する指針を改訂。その内容が報じられ、瞬く間に拡散したのだ。

新型コロナウイルスによる国内の死者数は、約七万四千人（四月四日時点）。この間、強く叫ばれ続けたのが、コロナワクチンの接種である。接種開始から二年余。五月八日からはコロナの感染症法上の位置づけが「五類」に引き下げとなる。ただ接種費用が公費負担となる「特例臨時接種」の期限は二年三月までに延長された。そんな中で突然公表された、WHOの方針転換。本当にワクチンが不要なのか。日常を取り戻しつつあるいま、われわれはワクチンと

どう向き合うべきなのか。まずはWHOの声明を検証していこう。

「WHOは決して『ワクチンには要らない』『接種は間違っていた』と言っているわけではありませぬ」

こう警鐘を鳴らすのは、日本感染症学会ワクチン委員長で鹿児島大学教授の西順一郎氏だ。WHOは今回、重症化リスク別に、ワクチン接種が優先されるグループを「高・中・低」の三つに分類した。「高」は高齢者や、糖尿病や心臓病などの重大な基礎疾患のある人、妊娠中の人や医療従事者などが該当。「中」は六十歳までの健康な成人など。「低」は生後六カ月から十七歳までの健康な子どもや青年とした。

子どもへの三回接種は有効

そして、「高」グループには、最終接種から六〜十二カ月後の追加接種が推奨された。その背景には、各国で、複数回のワクチン接種に関する研究データの分析が出揃ったことがある。「たとえば、イスラエルで行われた調査（六十歳以上の百二十五万人を対象）で、四回目を接種した人は三回接種した人よりも重症化リスクが三・五分の一という

結果が出ています」（防衛医科大学校病院感染対策室長の藤倉雄二准教授）

高齢者や基礎疾患のある人への定期的な接種は、有効であるということもWHOも認めている。前出の西

世界で六億七千万人以上の感染者と六百八十八万人以上の死者を出した新型コロナウイルス。ここに来てWHOが「救世主」としてきたワクチンの扱いを一転させた。そこで小誌は「もういいらない」のか「まだ必要」なのか徹底取材！

高リスク者への「定期接種」は今後も続けられることになりそうだ。

一方、物議を醸したのは優先度「低」グループの指針「転換」についてだ。

「WHOはこのグループに該当する健康な子どもや青年は、コロナのリスクが低いので、各国の事情を考慮して接種を決めるよう求めた。ところがロイター日本語版が三月二十九日未明に『WHO、コロナワクチン接種勧告を修正 健康な子

氏は、こう強調する。「日本では現在も高齢者などには、年二回接種を呼び掛けています」

長崎大学教授の森内浩幸氏もこう続ける。

「高齢者などリスクの高い人には、冬が始まる前にインフルエンザとコロナのワクチンの同時接種が行われるようになっていくでしょう」

テドロスWHO事務局長

「でも必要なし」と見出しを付けて記事を配信したのです」（厚労省担当記者）
将来的な健康被害への懸念もあり、子どものワクチン接種を躊躇う保護者も多かった。それでも日本では昨年九月から、五〜十一歳の小児に対しては一〜三回の接種が予防接種法上の「努力義務」とされた。
その結果、五〜十一歳の一九・四％、十二〜十九歳の七三・二％が、一回以上の接種を済ませた（四月三日時点）。それが今回、必要なし」と報じられたことで、SNS上で、「WHOにハシゴを外された」など

の声が相次いだのだ。本当にコロナワクチンは子どもには「必要なし」と結論付けられたのか。

「そうではありません。子どもに対して『三回目までの接種の有効性や安全性は認められる』と記載されています」（都内のひまわり医院・伊藤大介院長）
日本の研究でも子どものワクチン接種の有効性を示す結果が出ているという。

「昨夏のBA・5流行期に感染した子どもを対象とした新潟大学の調査では、ワクチンを二回以上接種した子どもは、そうでない子どもに比べ入院リスクが七五

％減少したことが報告されています」（西氏）
では、WHOは何を主張したかったのか。

「コロナ以外にも、はしかやロタウイルスなど、子どもにとってリスクの高い病気はたくさんあります。費用対効果の面で、何を優先すべきか、各国の流行事情で判断してほしいということです」（伊藤院長）

前述のロイター日本語版記事も、その後「健康な子どもは必ずしも必要なし」と見出しが修正されている。効果が立証された子どもへのワクチンだが、四回目以降の接種は必要なのか。

突出する日本の四回目接種

「重症化することも殆どなく、九割以上の子どもは二、三日で熱が下がって元気になります。四回目以降の定期接種の必要性は他の定期接種ワクチンより低いと言えるでしょう」（公立陶生病院感染症内科主任部長・武藤義和氏）

前出の森内氏も「リスクのある子どもでなければ、

強く勧める必要はないでしょう」と語る。

そして、子どもの接種問題以上に大きな関心を集めたのが、優先度「中」のグループへのワクチンの定期接種についてだ。多くの成人がここに含まれるため、

「これまで打った複数回のワクチンは何だったのか」という疑問を持つ人も。

岸田首相は五回接種済み
尾身茂政府分科会長（上）

「今回、三回目接種までは推奨するが、四回目以降の接種は現時点では定期的な推奨とはしない」とされた（武藤氏）
これまで日本では十八歳以上の成人について、三回どころか四、五回目のワクチン接種が、前述の「努力義務」として推進されてきた。その結果、四回目の接種率は四六・二％と、国民の半数近くが四回目接種を受けたことが分かる。しかし今回、WHOは四回目以降の接種を「推奨しない」と結論付けたのだ。

世界を見渡すと、日本は突出して、四回目以降の接種に積極的だった。米オックスフォード大などが公表した「Our World in Data」によれば、G20参加国の中でブースター接種（三回目以降の接種のこと）の回数が多いのは圧倒的に日本で、百人あたり百四十一回。二位のイギリスは百人あたり約百九回、米国は百人あたり四十回だ。「健康な成人に推奨されるのは三回目接種まで」というのは、世界的な潮流になっている。



自衛隊の大規模接種会場は閉鎖された

「海外の政府HPなどを見ても、高齢者以外の四回目接種率について大きく広報しているのは日本くらい。米国の医学雑誌では今年一月、健康な若い人たちに定期的にワクチン接種をして感染を防ごうとするのはやめるべき」との論文が掲載されました(同前)

では本当に、健康な成人は三回目接種までで良いのか。前出の藤倉氏は言う。「この指針で優先度『中』に該当する人々が対象の四回目接種の研究結果は、あまり発表されていない。これらの人の重症化リスクが高くないことを考えても『メリットがあるから四回目以降も積極的に打ちましよう』と断言する材料は乏しいと思います」

前出の武藤氏は「四回目以降は無理に接種しなくても良い」と語る。「いまのオミクロン株では、健康な成人なら、四回目以降を打たなくてもコロナで死に至ることはほぼあり得ない。ただし、ワクチンには重症化予防、つまり症状の早期改善の効果が認められているのも事実。『感染したとき一日も早く高熱を

子どもの接種が話題に

「国立感染症研究所の昨年十二月の報告によると、二価ワクチンを接種した人と未接種の人を比較すると、二価ワクチン接種で発症率を七〇%ほど減らせるという研究結果も出ています」

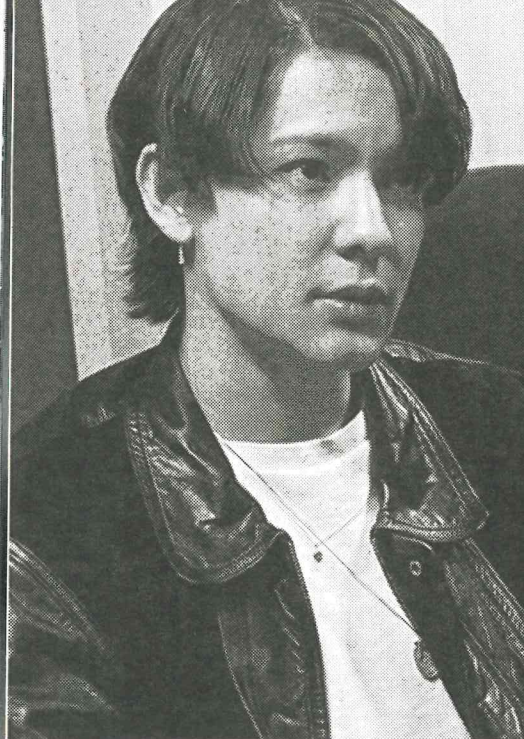
四回接種の感染予防効果は

二価ワクチンが一般的に打たれるようになったのは、昨年の秋以降。それ以降に三回目を接種した人は、すでに打ち終わっている可能性が高い。なぜこれまでワクチン接種を推奨してきたWHOは、方針を転換させたのか。「ワクチン接種の目的は、集団免疫を獲得して、感染を封じ込めることでした。しかし様々な調査結果から、ワクチンでの感染予防効果の限界が浮き彫りになってきた。そのため一定回

下げたい」と考える人なら、打ったほうが良いでしょう」オミクロン株に対応した二価ワクチンを接種していない人に、一度は打つことを勧めるのは、前出の西氏だ。「社会全体で感染拡大を阻止するため」にすべての人にワクチンを接種する時代ではなくなった。自身の命を守るため高齢者や基礎疾患のある人は、定期的な接種が望ましい。一方で、健康な成人や子どもは、打たなくても死なない。ため、それぞれで接種すべきか、検討することが求められる。その判断の材料として、気になるのは「次の流行はいつ来るのか」だろう。三月三十日には、東京都内の新規感染者数が十一週ぶりに増加傾向にある。徐々に増加傾向にある。「第九波」到来も懸念されている。前出の武藤氏はこう言う。「死者が最多となった第八波のような大きな第九波は、おそらく訪れないと思います」その理由は、この約三年

間日本人が獲得した「抗体」にあるという。「三月二十三日、厚労省のアドバイザリーボードで公表された資料によれば、前月の調査で日本人の抗体保有率は四二・三%でした。過去に感染していない人が多いほど感染が拡大しますが、抗体保有率が五〇%を超えれば、感染爆発が起こることは考えにくい(同前) また、オミクロン株に置き換わったことで、致死率が大きく低下。昨年七月八月の感染者では、八十歳以上の致死率は一・六九%。季節性インフルエンザが一・七三%で、インフルエンザ並み」となった。再び強毒化することはあるのか。「その可能性はかなり低いですが、オミクロン株になって感染力が強くなり、病原性も低下した。これ以上、感染力が強くなり、病原性の高い株が出現するとは考えづらい(西氏) それでもリスクがあることに変わりはない。自らがどのワクチン優先グループに入っているのかを知って、適切な対策を心掛けたい。

「ジャーニー」さんに15回されました被害少年が ついに実名、顔出し告発



岡本氏が撮ったジャーニー氏と家の中の暖簾(上)

サツサツサツサツ。少年たちが寝静まった深夜、廊下にスリッパの足音が響く。足音が自分の寝る部屋の前で止むと、少年の胸は張り裂けそうになった。「まさか今日? と」こう振り返るのは、二〇一二年から一六年までジャーニーJrとして活動した岡本カウアン氏(26)だ。ジャーニー時代は、『MY

ojio』(集英社)の表紙を飾ったこともある。ドラマ『GTO』(二四年、フジ系)や、トーク番組『Rの法則』(NHK Eテレ)にレギュラー出演するなど、二百人近いジャーニーJrの中でも、特に活躍した一人だった。小誌は過去四週にわたって、ジャーニーJr事務所創業者の故・ジャーニー喜多川氏によるジャーニーJrへの性過去四週にわたり、計六人から、ジャーニー氏による性加害の証言を聞いてきた小誌。そしてついに実名・顔出しで告発する元ジャーニーが現れた。岡本カウアン氏。今は個人で活動している彼が被害を受けたのは15歳の時だった。

ジャーニー氏の被害者は何人いるのか...

昭和34年4月21日第三種郵便物認可 令和5年4月13日発行(毎週木曜日発行) 4月6日発売 第63巻第11号

週刊文春

4月13日号 定価460円

